

人形姫

山本幸久

第十三回

十三

「じつは家賃の滞納について、あたし達代官山のスタッフの大半は前から薄々気づいていました。正確な額まではわからないけれど、相当な借金を抱えていることもです」

服部はっとりは言った。その真っ直ぐな視線に森岡 恭平きょうへいは気圧けおされてしまう。

「それで昨日の夜、私がおまえの話にしても反応が薄いなあとは思ってたんだけ。ですって、社長。私が言わなくても知っていたそうですよ」

「でもおまえ、言っちゃ駄目だって五代目には言われてたんだろ
うが」

自分が悪くないような言い方をする幸田こうだに、峰みねが噛みつくよう

に言う。

「そりやみんなして、隠していることがあるだろって俺を取り囲んで、詰め寄ってきたからさ。多勢に無勢とはまさにあのことだよ。

聞いてください、社長。ほんとこいつら、ヒドいんですから」

「なに言ってるのさ、幸田さん」阿波三姉妹の長女、須磨子がフンと鼻を鳴らす。「かけつけ三杯で紹興酒呑んだのだって、自分からでしょ」

「それから弱ったなあ、困ったなあ、どうしようって、一口呑む度のため息まじりで洩らしてさ」「なんだかんだ言ってる話さないではいられなかったくせに」二女の勢津子と三女の多香子がつづげざまに幸田を責める。

ここは曳抜川の河川敷だ。

「前々っていつ頃から？」幸田と職人達が揉めるのをよそに、恭平は服部に聞き返した。

「今年の春先くらいです」

答えたのは服部ではなく、フィギュア事業部のべつの子だった。十八歳の男子だ。細身で小さいために十五歳前後にしか見えないが、愛らしい顔をきりりと引き締めている。阿波三姉妹は彼を「紅顔の美少年」と呼んでいた。

「部長の机の上に請求書や督促状が、封を切らないまままで山積み

になっていたので、処理しなくていいんですかって言ったら、きみが心配することじゃないよと笑うだけでした」

「よそへ打ちあわせにいった際、おたくの会社からの振込が滞とじこおっているけどどうなっているのって、苦情を言われたことも一度や二度ではありません」

「ここ最近、事務所にその手の電話が何件もかかってきていますし」

フィギュア事業部のスタッフが口々に言う。それだけのことがあれば、だれだってヤバイと気づくだろう。

「代官山の事務所は三ヶ月分、家賃を滞納しているんですよ」
服部は恭平を見据えたままだ。他の六人も鋭い視線を、恭平にむけていた。

「来週中には本社で工面して払うさ」
「ぜんぶで五百万円以上になるが仕方がない。」「ねえ、幸田さん」

「あ、はい。賃貸管理の会社とは連絡を取りましたし」

「でも幸田さん」

「な、なんでしょう」
服部に呼ばれ、幸田はびくりと身体を震わせた。

「この先、代官山の家賃を払いつづけていくのはぜったい無理だった、昨日、おっしゃっていましたよね。ひとまずあと一ヶ月分は捻ねん

出して、来月中にはあそこを引き払ってもらわなければならない、だからといって引越す先があるかどうか、それどころかいまの半額どころか三分の一も払いつづけていくのは厳しい、そんな家賃で五十人もの社員を収容できるオフィスがあるはずがない、どうしたらいいだろうと社長が頭を痛めているとも」

「そ、そこまで話した覚えはないんだけどなあ」

幸田はしきりに頭を捻る。トボケているというより、本気で覚えていないようだった。しかし話したのは事実だ。そうでなければ服部が知っているはずがない。まったくもってやれやれだ。

「そのへんの話は来週中には私が代官山にでむいて、説明しようと思っていたんだ。きみ達の意見も聞きたかったしね。誤解しないでもらいたいのだが、けっして隠していたわけじゃないんだ。私自身、善後策を考えたいうえで打ち明けないことには、混乱するばかりで、みんなを不安にさせてしまうと思っていたわけで」

嘘ではない。なのにどうしても言い訳めいた口ぶりになってしまった。気づけばファイギュア事業部のスタッフばかりか、職人達も恭平を見つめている。

「えっと、それでそうだ。服部さん、さっき提案したいことがあるって言うってたけどなんだろ」

「ファイギュア事業部の引越し先についてです。森岡人形本社ほど

うでしょう?」

「賛成っ」真っ先に同意したのは熊谷良隆だ。くまがいよしたかファイギュア事業部の、それも女の子達とお近づきになりたいと思っっている彼にすれば、願ったり叶ったりである。他にも賛成の声があがった。宮沢だ。

「これからちようど共同でアメコミの人形をつくるわけだし、いっしよの職場ならば、ことがスムーズに進むってもんだ」

「ですよね」紅顔の美少年が相槌あいつちを打つ。「ぼくも職人のみなさんとおなじ職場で、いろいろ勉強させてもらえればと思っっています」

「私も賛成」「名案だわ」「毎日、若い子達がいるなんてサイコーよね」阿波三姉妹がはしゃぎだす。

「たしかに本社ならば家賃を心配することがありません」幸田もノリノリだ。「ぜひそうしましょう、社長。ね?」

「ファイギュア事業部は五十人以上いるんですよ。それをどうやって本社に詰めこむんですか」

「五十人くらいならなんとかなるでしょう」これは遊木だ。ゆぎ「昭和のおわりには職人だけで七十人以上いましたからね。ちよっとキツめでしたが、毎日賑にぎやかで、活気もあつてよかつたなあ」

「そうだ、そうだ」「よかった、よかった」「懐かしいわあ」「またあの頃に戻るなんて」「夢のよう」

職人は揃ってうれしそうだ。ファイギュア事業部のスタッフも満まん

更ひきではない面おも持ちである。

「いや、でも」

「なんです、社長」幸田が顔をしかめる。水を差すと言わんばかりだ。「まだなんか文句があるんですか」

「文句じゃありません。現実問題です」恭平は服部に顔をむける。

「きみの自宅から代官山の事務所まではどれくらいなんだい」

「下北沢しもきたざわに暮らしているんで、だいたい三十分くらいですけど」

「鐘撞市の本社までは」

「二時間です」

「往復で四時間、通うことになる」

「ですから、あたしはこっちに越してこようと思って」

「だったらウチにいらっしやいな」須磨子が口を挟んできた。「溝みぞ

口くちさんも暮らしているのよ。猫もたくさんいるし」

「服部さんは須磨子さんの家に暮らすとしても、他のスタッフはどうするんです」

「ウチならあと二、三人引き受けてもいいわ。せつちゃんやタエちゃんの家にもひとりずつくらいだったら居い候さうろうさせられるし」

「なに言ってるんの、スウ姉さん」「そんなことできっこないでしょ」

妹ふたりが慌てて抗議する。

「ウチだったら五人は住める」

宮沢が胸を張って言う。そういう問題ではない。

「フィギュア事業部は五十人以上いるんですよ」

恭平が指摘すると、宮沢と須磨子に恨めしそうな顔で睨にらまれてしまった。だが気にしてはいられない。

「鐘撞市の本社まで片道二時間以上の人は手を挙げてくれないか」

恭平の問いかけに、フィギュア事業部の残り六人全員が手を挙げた。

「二時間半以上は？」四人、手を挙げたままだ。「三時間以上」まだふたり挙げていた。

「もう下げていいよ。どうする？ きみ達も鐘撞に越してくるのか」と

「ぼくはそのつもりです」紅顔の美少年が答えた。彼は片道三時間以上のひとりだった。「今朝もネットでこのへんの賃貸情報を見てたんですが、都心より一、二万円安いんですね。それに何度か通ってみて、緑が多くて住むにはいい環境だなあと」

「きみはどうだい」恭平は片道三時間以上のもうひとりに訊ねた。

二十代後半の女性だ。「ここに引越してこようと思う？」

「私、去年、結婚をしまして」彼女は顔を強張こわらせ、服部を横目で見る。「それと同時にマンションを購入したばかりなんです」

夫を新居に残し、引越すわけにはいくまい。

「毎日往復六時間以上通える？」

「それもちょっと」

「だったらやめれば？」

服部が冷たく言い放つ。その言葉に恭平がカチンときた。

「きみにはそんな権限はないだろ」

「け、権限はありませんけど」恭平に注意されるとは思っていないか
つたらしい。服部は目を瞬しばたかせる。「でもこの先、やっていけな
いってひとに無理強いしても意味ないじゃないですか」

「きみはさつき、フィギュア事業部を代表してと言ったけど、ほん
とにそうなの？」

「あたしが本社に引越すべきだって言ったら、みんなが賛成して
くれて」

「みんなってフィギュア事業部のみんなってことかな」

「それは」服部は言葉を詰まらせる。やがて気まずそうに、「ここに
いるスタッフだけです」と小声で答えた。

「鐘撞高校ボオト部ウウウ、フアイトオオオ」「フアイトオオオ」
曳抜川でボートを漕ぎつづける現役のボート部にむかって、土手の
上から女子高生達が声援を送った。ちよつと恥ずかしげだが、ボ
ト部員に気持ちが届けとばかりに精一杯、声を張りあげていた。つ
づけて彼女達はこうもつづけた。「イッテイアリテイイチニンナアア

シッ」「イッテイアリテエイチニンナアアシッ」

一艇ありて一人なし。

自分の力を十二分に發揮しながらも、チームの一員である意識を持ち、そのチームに貢献するからこそ、さらにまた自分も活かされる。個人でもあり同時にチームでもあるのが、ボートを漕ぐことの醍醐味だいごみだと言っている。

いっただか溝口真純ますみにむかって説明したのを、恭平は思いだした。すると彼女は人形づくりとおんなじですねと言った。

つまり一体ありて一人なしですね。

人形づくりもそうだが、会社もまたそうではなからうか。

「服部さん」

「な、なんでしようか」

「きみの意見は間違っていない。フィギュア事業部は本社に引越せざるを得ないのはたしかだ。そうなったとしても、フィギュア事業部のスタッフにはつづけて働いてほしい。毎日、通うのが難しいのであれば、週に何回かでもかまわない。フレックスタイム制や自宅勤務というのもありだ。だがまずは個々の意見を聞きたい。そのためには週明けには代官山で、フィギュア事業部のスタッフひとりずつと面接をして、できる限り要望を聞き入れることにしたいんだけど、どうかな」

たとえそうしたところで、全員が納得できる結論にはなるまい。世の中そんなに甘くない。だがやれることはやったほうがいい。

「もしこのあと予定がなければ、いまから本社にいつて、きみ達、先に面接しちやわないか。せつかくここまで来たんだし、このまま帰るのもなんだろう？」

「お願いします」真つ先に答えたのは、昨年結婚したばかりの彼女だった。「私、フィギュアの仕事が好きなんです。これから先もつづけていきたいんです。ぜひ話をきいてください」

「あたしだってフィギュアの仕事が好きです」負けじとばかりに服部が言う。「森岡人形のためにこれからも働きたいと思っています」他の五人も異論はなく、本社へいくことになった。

「すまんが良隆、あとは頼んだぞ」鐘撞高校ボート部のことである。今日は昼休みを挟んで、午後も練習なのだ。

「了解です。ばっちり鍛えてやります」

「というわけで、私とフィギュア事業部のみんなは本社へいきますけど、みなさんはどうします？」恭平は職人達にむかって言う。「なにかいまのうちにおっしゃりたいことがあればどうぞ」

「久佐間くさまさんのこと、話しておくべきじゃない？」須磨すま子が言った。

「そうだわ」勢津子が応じる。「五代目は久佐間さんが髪付師として

ウチで働く前に、なにをしていたかご存じ？」

久佐間は六十七歳だ。他の職人ときほど変わらぬ歳だが、森岡人形で髪付師として働きだしたのは五十代なかばだった。恭平が社長になる二、三年前である。

だが、なぜいまその質問を？

「知りませんけど」

「私達も知らなかったのよ」これは多恵子だ。「昨日の呑み会で、はじめて聞いてビックリしちゃった」

「なんだったんですか」

どうも年寄りは回りくどくていけない。ふだんから慣れているにせよ、恭平は少し苛いらついてきた。

「タンテイをしたそうよ」須磨子の答えが、あまりに予想外だったため、恭平の頭の中で、タンテイを探偵と漢字に変換するのに三秒はかかった。「新宿にあるけっこう大手の会社で、三十年近く働いていたんだって」

「どうして久佐間さんは、昨日の呑み会の席で、いきなり自分の過去を打ち明けたんですか」

だれにともなく恭平が訊ねる。

「慎しんじ次さんが行方不明だって話を、幸田に聞いたからですよ」答えたのは峰だった。幸田を横目で睨みながらである。しかし当の幸

田は素知らぬ顔だった。「ならば元探偵の俺が捜してこようと言いだして」

「捜すってどうやって？」

「仕事以外にどんな付きあいがあるのか、あたし達に訊いてきたんです」と服部。「だから恵比寿のクラブでDJをやってるって」

久佐間はそのクラブの名前と場所までフィギュア事業部のスタッフから聞きだしたらしい。

「そしたらちよつといつてくるって、店をでてきちやったんです」

服部が言う店とは鐘撞駅前の中華料理店だ。それが夜の八時過ぎだったらしい。

「今朝、五代目のところへいくぞって、久佐間にもグループLINEで報しらせたんですがね」服部の話を引き継ぐように峰が話します。グループLINEは職人達のだろう。ただし宮沢は入っていない。スマートフォンどころかガラケーも持っていないからだ。「いまから仙台にいくんで無理だって」

「どうして仙台に？」

「と私達も思いまして、みんなで矢継ぎ早に訊いたところ、恵比寿のクラブで有力な情報を得た、慎次さんは仙台にいるらしいんで、ひとまずいつてみる、なにかわかればまた連絡すると」

峰の話にどう反応したらいいものか、恭平はよくわからなかった。

慎次が心配ではある。でもこの先ずっと、行方知れずのような気がしていた。そんな弟を久佐間が捜しだそうとするのが、とても無謀な企たくらみに思えてならなかったのだ。

DJの話をも弟本人から聞いたのは、この河川敷だった。去年の秋だったように思う。恵比寿のクラブで昭和の歌謡曲が流はや行っていたからと、家にあつたシングルレコードを借りにきたのである。そのとき慎次は歌手の名前も曲目も思いだせずに、親父が好きだったあの歌だと、一節唄ってみせた。それをミラクル・ローズの『無愛想ブルース』だと当てたのは、たまたま居合わせた溝口真純だった。

そういえば溝口さんはどうしたのだろう。

「溝口さんはどうしたの？」

恭平の気持ちを代弁したのは良隆だ。溝口と暮らす勢津子に訊ねていた。

「桜井さんの講演会が都心の美術館であつて、その手伝いに行ったわ。受付と物販を任せられたんで、断ることができないって。あの子、最近、桜井さんとよくツルんでいるのよね」

♪機嫌直せと言われても

怒ってなんかいないのよ

どうぞお気になさらずに

あなたはなにも悪くない♪

気怠けだるいながらも、若さが隠し切れない歌声だ。それもそのはずで『無愛想ブルース』を発売したとき、ミラクル・ローズは二十代前半だったのだ。さきほどウイキペディアで調べてわかったことである。

恭平は社長室のソファで寝そべっていた。ついでしたがた鳩時計から鳩があらわれ七回鳴いた。夜の七時だ。窓の外はすっかり暗くなっている。

フィギュア事業部七人の面接は、なかなかの長丁場だった。曳拔川から本社に戻ってきたのは昼前で、まずは腹ごしらえと出前のピザを振る舞った。

面接はジャンケンで勝った者順にした。ひとり三十分を目安にしたが、たいがいはそれ以上になった。三番目だった服部などは一時間でもおわらず、最後のひとがおわったあと、さらに一時間、話を聞かねばならなかった。他のひと達は個人の要望が主だったものの、彼女はフィギュア事業部の今後の展開、およびフィギュア業界の未来についてまで熱弁を振るい、とどまることがなかったのである。フィギュアについての知識が乏しい恭平にすれば、ありがたかったくらいだ。

でもさすがにくたびれた。面接は社長室でおこなっていたのだが、服部が六時過ぎに去ってすぐ、ソファに寝転ぶと、そのまま動けなくなつた。しかし^{まぶた}瞼を閉じてても、眠れなかつた。

週明けには残り四十人以上いるフィギュア事業部のスタッフと面接だ。今日のことを踏まえると、一日十人が精一杯だろう。少なくとも五日はかかる。だがこれだけに掛かりつきりというわけにはいかず、弟の借金の始末をやらねばならないのだ。そのへんのことには幸田だけでなく、良隆にも手伝わせるとするか。

♪わけを話せというのなら

教えてあげるう

傷ついても知らないわ

惚れた男の前でしか

笑うことができない質なの

このあたらしい♪

ふと思いつき、ミラクル・ローズについて検索したところ、なんと動画サイトにほぼ全曲あがっており、早速、聞いてみることにした。親父がどうしてこのひとの歌が好きだったのかはよくわからなかった。とりわけウマイかと言えばそうでもないのだ。でも聞いて

いるうちに、癖になるといふか、中毒性があるように思えた。

さらに検索をつづけ、若い時分のミラクル・ローズの写真もでてきたが、とりわけ美人でもなかった。言っではなんだが、母親のほうはずっとマシだ。するとこの歌声に魅了されたのかもしれない。

「そのへん、どうなの、親父」

壁にかかった親父の写真に呼びかけてみた。いつも以上に仏頂ぶつちやう面で、そっぽをむいているように見えるが、もちろん錯覚にちがいない。それでも恭平はさらに言葉をつづけた。

「朗報があるぜ。ミラクル・ローズはまだ生きているんだ。それだけじゃない。いまでも唄いつづけているんだ」

半年ほど前に地元の新聞で、ミラクル・ローズはインタビューを受けており、その記事がネットにアップされていたのだ。はこだて函館で呑み屋のママをしながらも、ごく最近、七十歳を間近にシャンソン歌手として再デビューを果たしたそうだ。地元の函館や札幌で、ステージに立ち、リクエストがあれば、昔の持ち歌も披露していると
いう。

弟の件が一段落したら、函館なり札幌なりまで、ミラクル・ローズの歌を聞きにいったもいいいと、恭平は考えた。でもなにがどうしたら一段落なのだろう。かいもく皆目見当がつかない。

♪ブウアイツソオオ、ブウアイツソオ、
ブアイソオオオブウル

曲がブツリと途切れ、代わりに軽快な音が社長室に流れてきた。電話がかかってきたのだ。だいぶ凹んだ腹の上に置いていたスマートフォンを手に取る。画面には久佐間の名前がでていた。疲れ果てていた身体を起こし、スマートフォンを耳に当てる。

「五代目」「慎次は見つかりましたか」

ふたりの声が重なる。

「すみません、まだなんです」久佐間が詫^わびた。「俺が探偵だったって、峰さん達からお聞きになったそうで」

「ああ、うん。昨夜のうちに恵比寿のクラブにいったって、今朝から仙台にむかっただってことも」

「クラブになんて足を踏み入れたのは二十年振りですよ。とはいっても以前にいったときもプライベートではなく仕事で、やはり人捜しでしたがね。昨夜にいったところは、昭和歌謡ナイトだとかで、俺が若い頃の曲がつきからつきへと流れていて、危うく本来の目的を忘れて踊りだしそうになりました。はは。もちろん冗談ですよ」

いつもの久佐間とちがい、ハキハキとよくしゃべった。声もふだんとちがい、少し高めだ。そもそも冗談なんて言うタイプではない

のだ。これが本来の彼なのかもしれない。

「裏口にまわって、オーナーに会って、慎次さんの行方を捜していることを正直に話したところ、ぜったい捜しだしてくれって訴えられるように言われてしまいました。なんでも慎次さんに十万円貸してるそうなんです。その場にいたDJ達の中にも五千円から五万円くらい、ちよこちよこ借りてて、まだ返してもらっていないと」
なにやっつてんだ、アイツは。

弟の不始末が自分のことのように思え、恥ずかしくてたまらなかつた。

「するとDJのひとりが、相互フォローしている仙台のクラブのツイッターに、慎次さんらしき人物が出演している動画がアップされていたと言うんで、その場で早速、見せてもらっただんですよ。グラサンかけて、マスクをかけていましたが、たしかに慎次さんでした。四代目のお好きなあの曲を流していましたし」

『無愛想ブルース』ですか」

「はい」

弟はあのレコードを持ち歩いているのか。

「それで久佐間さんは仙台のクラブに？」

「でもタッチの差で、間に合わなくて。申し訳ありません」

「久佐間さんが悪いわけではないでしょう。なにがあったんです？」

「三日前の水曜、慎次さんは仙台のクラブにアポなしでやってきて、出演させてほしいと言ったそうなんです。リハを見たら悪くなかったので、その晩、早速でもらうと、想像以上に盛り上がって、お客さんに好評だった、そこで昨日まで三日連続で出演させて、クラブのオーナーとしては、この先もお願いするはずだったのが、今朝方、慎次さんがスマホに電話をかけてきて、よそへいくことになった、三日間の出演料を現金でくれないかと嘆願するように言うので、昼前にクラブにきてもらって、五万円渡したところ、何度も礼を言っただけで去ってしまったそうです」

久佐間がそのクラブを訪ねたのは、その三十分後だったらしい。まさしくタッチの差だ。

「それを聞いて、まだ間に合うかもしれないと、仙台駅にいった時間以上くまなく捜して、駅員や売場の店員、観光案内のスタッフなどに慎次さんの写真を見せましたのですが駄目でした。やむなくクラブのほうに戻り、周辺を聞き込みしてまわって、慎次さんが寝泊まりしていたネットカフェを突き止めました。そこで新たな事実がひとつ、明らかになりました」

「行き先がわかったんですか」

「すみません、そうではなくて」久佐間は申し訳なきように言う。

「慎次さんはひとりじゃなかったんです。お連れの方がいらして」

慎次に女が？　と思ったものの、そうではなかった。

「カフェの店員が言うには、東南アジア系の男性で、日本語はほとんどできなくて、慎次さんが面倒を見ていたようで、部屋は別々でしたが、使用料はいずれも慎次さんが支払っていたと」

「だれでしょうか、東南アジア系の男性って」

「そこまではちよつと。とても人目を気にしてて、日がな一日部屋にいて、滅多めったに姿を見せなかったというんですよ。でていくときもふたりともだいぶ慌てて、逃げていくようだったと、店員が話していました」

ということだ。

「だれかに追われているかもしれない？」

「可能性はあります」

でもだれに？

「どうしますか、五代目。慎次さんのこと、まだ追いかけたほうがいいですかね」

「できるんですか」

「こつから先は、ひとりでは厳しいので、古巣の知りあいに声をかけて協力してもらいます。引退して暇を持って余している連中ばかりですが、むろんタダというわけにはいきませんが。でも探偵事務所に頼むよりもずっと格安にしてもらうことは可能です。どうぞしよ

う、ひとまず一週間やらせてもらえませんか」

久佐間の鼻息が荒くなっているのに気づいた。彼にすればタツチの差で取り逃がしたのが悔しいのだろう。元探偵としての意地を通したいのかもしれない。

「わかりました。お願いします」

「ありがとうございます。必ず慎次さんを取っ捕まえて、いえ、見つけだしてみせます」

「あっ」

「どうしました、五代目」

「東南アジア系の男性で、思い当たることがあったんだ。弟が工場を建てようとしていた国が、そのあたりで」

「クーデターが起きた国ですよね」

「慎次はあの国の政府の高官と親しくて」親しかったわけではない。工場をつくらんがために接待していたのだ。「日本に家族揃って招待して、アイツがつきつきりで案内をしたこともあるようで」

「いっしょにいる男は、国を逃げだしてきた人間？」

「かもしれません」

「だとしてもなんで、人目を忍ぶようにして、わざわざいっしょに行動しているんでしょうねえ」

久佐間がつぶや呟く。恭平に訊ねたのではなく、自問しているようだ

った。

「そうだ、五代目。これとはべつにお話ししたいことがあるのですが」

「なんででしょう」

「先代にだれにも言わないでくれと頼まれて、墓場まで持っていくつもりだったのですが」まるきりおなじような台詞を、だれかに聞いた覚えがあるが、あれはだれだっただろう。「じつは俺、探偵だった頃、先代の依頼で調査をしたことがあります」

「親父にですか」

「ええ。かれこれ十五年以上前になりますか。五代目はアカツカマユミというひとをご存じですか」

アカツカは漫画家の赤塚不二夫の赤塚、マユミは草の麻に自由の由、美しいで麻由美だと教えてくれたものの、恭平には心当たりがなかった。

いや、待てよ。

名前のほうは以前、だれかに聞いたことがある。そのときもマユミのマが麻だと説明をされたのだ。だれかは宮沢だ。

「ずっと昔にウチで頭師として働いていた女性ではありませんか。

美大生で親父に弟子入りしたっていう」

「まさにその方で」

当時、森岡人形では頭師が十人以上いたため、赤塚麻由美は東京の自宅マンションで頭をつくっていた。この頭を取りにいくのが宮沢の役目だったが、ある日、彼女のマンションをでてきた親父と、ばったり出会でくわしたことがあった。そのとき親父にだれにも言わないでほしいと頼まれ、そして、そうだ、墓場まで持っていくつもりだったのですが、と宮沢が言ったのだった。親父のまわりは口が軽い人間ばかりだ。

そのあと三ヶ月もしないうちに、赤塚麻由美は一身上の都合で森岡人形を辞めて、東京のマンションも引越してしまい、消息がわからなくなったのだという。そして溝口真純の生年月日はその半年後だった。

これがただの偶然だと坊ちゃんはおっしゃいますか。

宮沢はそう言うが、恭平はただの偶然にしか思えなかった。しかしだ。

「その赤塚麻由美さんの消息を調べてくれというのが、先代の依頼でした」

「え？」恭平は驚きのあまり声を洩らしてしまう。「なんで親父はそんなことを」

自分の子を生んだ女の行方が気になったのか。だとしたら溝口真純が親父の娘だという、宮沢の説は正しかったことになる。

だがそうではなかった。

「先代は赤塚麻由美さんの腕に惚れ込んでいました。頭師としてはずば抜けた才能があったと、おっしゃってました。その頃、五代目はふつうのサラリーマンになってしまったので、先代としては高校を中退後、森岡人形で働く慎次さんに跡を継がせるおつもりだった。ところがその慎次さんも頭師として修業をしていながら、日本人形よりもフィギュアが好きときている。宮沢さんや峰さんがいるものの、当時で六十の大台になっていましたからね。このままだと森岡人形の将来が危うい。そこで赤塚麻由美さんを見つけだし、森岡人形に復帰してもらおうと考えたんですよ」

マジかよ、親父。

恭平は壁に掛かった親父の写真を見上げる。当然ながらさきほどとおなじ、仏頂面でそっぽをむいたままだ。

「赤塚麻由美さんは見つけることはできたんですか」

「もちろんです」久佐間は不服そうに言った。自分の探偵としての腕前を疑われたと思ったのかもしれない。「十歳年上のバツイチで子持ちの方と結婚なさって、北陸のほうにお住まいでした。その旦那さんとのあいだに娘さんをひとりもうけて、ふたりの子どもを育てながら、小学校の美術の先生をなさって、そのことを報告すると、さすがにこれではウチに復帰するのは難しそうだかと先代は残念そ

うに言っていました。ところが後日、俺が探偵の仕事に嫌気がさして、森岡人形で髪付師として働かせてもらうようになってしばらく経って、先代とふたりきりになったときに聞いたんですけどね。先代は諦めきれず、調査の報告を受けた直後、北陸まででむき、赤塚麻由美さんに会って、復帰の話を持ちかけたらしいんですよ。いまして、すぐでなくともいい、子どもの手が離れてからでもかまわないとまで頼みこんでも、ご冗談をと笑って断られたそうで」

それはそうだと恭平が思っていると、話にはまだつづきがあった。

「五代目は宮沢さんに妙なこと、吹きこまれていませんか」

唐突な質問ではあったが、久佐間が言う妙なことがなにか、恭平はすぐに気づいた。

「溝口さんが親父の娘だと」

「その理由を、あの方はなんと言っていましたか」

「親父が好きな『無愛想ブルース』を口ずさんでいることと、それと娘でなければ、あそこまで先代の雛人形をそっくりそのまま、つくれない、母親に教わったにちがいないって」

「やっぱり」久佐間は小さく笑った。「俺達職人にも、そうは思わなかって、訊ねてきたのですが、だれも一笑に付して相手にしませんでした。俺も他のみんなとおなじにしましたけどね。さすがは宮沢さんだと思っはいたんです」

「それじゃ、溝口さんはほんとに親父の？」

「そこはちがいます」

「そこはって」

「母親に教わったってところは正解なんですよ。赤塚麻由美さんは結婚をして、溝口麻由美さんになっていたんです」

なんとまあ。

「それって溝口さん本人には」

「言っています。彼女自身はその話をしませんので、私も黙っています」

「だったら彼女が赤塚麻由美さんの娘だという確証はどこにも」

「俺は記憶力がいいんですよ」久佐間はちよっと自慢げに言った。

「赤塚麻由美さんを調査した際、二女の名前が真純だったのをはっきり覚えていました。おなじマでも母親がアサの麻で、娘が真実の真だって、そのときも思いましたからね。それと彼女が家族と暮らしていた町の名前もです。溝口さんの歓迎会するとき、本人に実家について訊ねたら、その町でした」

「やだ、嘘、森岡先輩ですよねっ」

嘘もへったくれもない。それにしても森岡先輩なんて呼ばれたのは高校卒業以来だ。恭平はどう対応したらいいものか、わからなか

った。声をかけてきたのは女性だ。しかもひとりではない。

「鐘撞高校ボート部のキャプテンだった森岡先輩でしょう？」

べつの女性が確認するように訊ねてきた。

「は、はい」

「信じられないあい、おひさしぶりですう」

さらにまたべつの女性が言った。そして また瞬く間に自分とさほど
変わらない、つまり三十代なかばと思しき女性数人に囲まれ、恭平
は足を止めざるを得なかった。あまりの迫力に押されてしまったと
いうのもあった。

「森岡先輩、全然変わってないわあ」「それに比べてあたし達なんか
全然変わっちゃって」「あたし達のことおぼえてますう？」「おぼえ
てるわけではないじゃない、こんなに変わってたら」「やだあ。言うほど
変わってないわよお。ですよねえ、森岡先輩」

「あ、うん」

ここは鐘撞市郊外にあるショッピングモールだ。閉店間近で人影
はまばらで、だからなのか、女性達は遠慮なく黄色い声をあげた。

いよいよ明日から おびなめびな男雛女雛の新作コンテストがはじまる。これ
にあわせてゴールデンウィークの前半五日間、特設会場の一角で、
人形づくりのイベントを実施することになった。その準備を九時の
閉店後にするため、代官山から駆けつけたのである。

今週は月曜から今日までの五日間、フィギュア事業部全員の面接をおこなった。ある程度、覚悟はできていたとはいえ、体力的にも精神的にもだいぶ消耗しょうもうした。声は掠かすれ、頭が少し痛いくらいだ。

「けどどうして森岡先輩、ここにいらっしゃるんです？」

「あなた知らないの、先輩はずいぶん前にお父様を亡くして、人形屋さんを継いだのよ。ですよね、森岡先輩」

「かれこれ十年になるかな」

「ご結婚は？」

避けたい話題だが、答えねばならないだろう。

「いまはひとりだよ」

「あたしもなんですう」「嘘言いなさい。旦那ひとりに子ども三人いるじゃない」「旦那がひとりなのは当たり前でしょ」

女性達は揃って弾けるように笑う。その笑い声が頭に響いたものの、恭平はどうか口角をあげて、笑顔を保った。

「いっしょに写真撮りませんか？」「いいですか、森岡先輩」「だれかのスマホで撮って、LINEで流せばいいわよね」「だれのスマホで撮る？」「あたしのスマホであなた撮ってよ」「それじゃあたしが写らないでしょ」

これまたもう一騒ぎだ。いっそ走って逃げようかと思っていると、近づいてくるひとがいた。桜井桃枝ももえだ。

どうしてここに？

男雛女雛コンテストも人形づくりのイベントも、彼女は関係がない。鐘撞市のそれも郊外のショッピングモールにくる必要はないのだ。

「よろしかったら私が写真、撮りましょうか？」

そばまで辿り着くと、桜井は女性達に申しでた。

「いいんですかあ」「すみませえん」「お願いしまあす」

「おモテになるんですね、社長」

キヤアキヤアはしやぎながら去っていく女性達を見送りながら、恭平の隣で桜井が言った。冷やかしか、あるいは皮肉にしか聞こえず、なんと返すのが正解なのかと考えてはみたものの、結局は「どうしてここに？」とさきほど思ったことを、そのまま口にするしかなかった。

「小金井からここまで車で一時間半かからないんで」

桜井が代々木から小金井に引越したのは一月の末だったはずだ。結局、引越し祝いをしていないのを思いだしたが、いますべき話ではない。

「なにか用？」

「会ってお伝えしたほうがいいと思って」

慎次のことかと思いきや、そうではなかった。

「トーキョーローカルサイキックのことなのですが」

「それはいいニュース？ それとも悪いニュース？」

桜井はにんまり笑い、こう答えた。

「いいニュースです」

〈つづく〉